

# 地域の人々が元気になれる拠点づくりの可能性

—認定 NPO 法人じゃんけんぽんの実践にみる

コミュニティ・カフェと配食サービスの併設—

Possibilities for Creating a Center for Community Empowerment:  
Co-Foundation of a Community Café and Meal Delivery Service as Seen  
in the Activities of the Certified NPO “Jankenpon”

野村 知子<sup>※1</sup>

キーワード： コミュニティ・カフェ、配食サービス、見守り、地域包括ケア、介護予防

## はじめに

じゃんけんぽんは、1998 年の「宅老所」開設をかわきりに福祉事業を開始し、2012 年に認定 NPO 法人を取得した群馬県の NPO 法人である。認知症グループホーム 3 ヶ所、小規模多機能居宅介護支援事業所 2 ヶ所、看護・小規模多機能居宅介護 1 ヶ所、看護・小規模多機能居宅介護と定期巡回随時対応型訪問介護看護の併設 1 ヶ所、居宅介護支援事業所とコミュニティ・カフェの併設 1 ヶ所、研修センター 1 ヶ所、自然体験施設 1 ヶ所の合計 10 ヶ所の施設を経営し、地域通貨、有償家事援助、福祉有償運送、配食サービスといったサービス提供も行っている。職員 100 名、ボランティア 100 名余りを要する大組織へと急成長を遂げている。

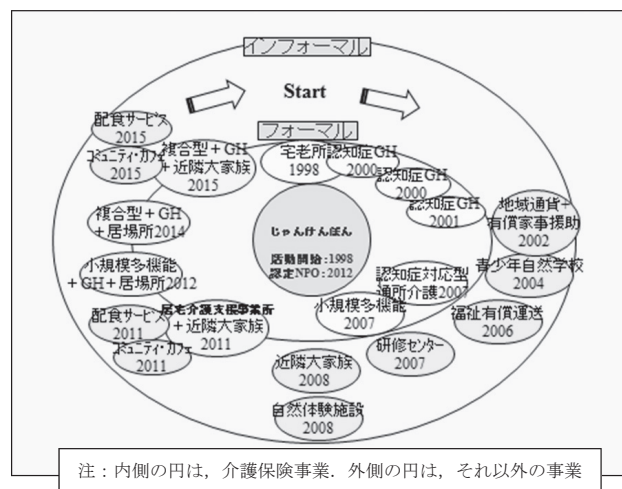


図-1. 介護保険事業と独自事業、併設の分類による「じゃんけんぽん」の事業展開

※1 NOMURA, Tomoko 桜美林大学総合科学系

図-1において、これまでの事業の進展を時計回りに時間軸で並べている。内側が介護保険事業（フォーマル）、外側を介護保険外事業（インフォーマル）として事業を配置した。この両者を併設させた場合、境界線上に位置づけた。開設当初は、介護保険事業、2002年から2008年までは、両事業を同時並行的に実施し、2011年のコミュニティ・カフェ、近隣大家族の開設以降は、境界線上の事業、フォーマルとインフォーマルを併設させた形で事業展開を図ってきていることがわかる。

当団体の基本ポリシーは、第一に、認知症になっても安心して暮らせるまちづくりをめざしていること、第二は、高齢者だけでなく、子ども、障害者、母親へのサポートを含めたあらゆる人々の支援を行う共生型の活動をめざしていること、第三は、コミュニティ・カフェによる地域の居場所づくりとボランティア活動を組み合わせることで、人々が元気になるだけでなく、支え手にもまわる、福祉コミュニティづくりを構築しようとしている点があげられる。

本稿では、2011年から始められた棟高町のコミュニティ・カフェとそこでの配食サービスをとりあげ、従来の手法との違い、地域の人々を惹きつける魅力づくりの秘訣、参加した人々が元気になり、担い手の気持ちを膨らませることのできる取り組みについて、個々に検討する。そしてこの2つの手法が同一組織の同一拠点で行われることの意義も含め、じゃんけんぼんの取り組みの有効性について論じる。

## 1. じゃんけんぼんのコミュニティ・カフェ

### 1) 一般のコミュニティ・カフェの実態と定義

コミュニティ・カフェは、人間関係の希薄化が進み、孤立や孤独の問題が大きくなる社会の中で、カフェという場を用いて、現在の孤独になりがちな人々へ居場所を提供し、人々のネットワークをひろげ、情報のノード（たまり）となり、ひいてはコミュニティの力を強めることができる、すぐれた手法である。

コミュニティ・カフェの数は近年急速に増えていて、2011年に倉持が行った全国調査によると、625カ所の存在が確認されている。コミュニティ・カフェの中には、①カフェ業務を重視しているところもあるが、②住民が交流する場所を作りたかった、③子供・障害者・高齢者・不登校児などの居場所を作りたかったという、人との関係を伴った居場所を目的としている場合が多い（倉持の調査では、①は11%、②は26.7%、③は21.7%）。しかし、ふれあいや居場所を目的にしたところから、飲食の提供を重視しているところまで、コミュニティ・カフェの運営や取り組みは、実に多様である。

コミュニティ・カフェの定義は、「一般的なコミュニティセンターよりも小規模であるが、運営や利用の自由度が高く、様々なニーズに対応しやすい」（飯田ら2008）、「誰もが訪れることのできる場所、気楽に立ち寄れる場所、それぞれが思い思いに過ごせる場所を実現し、他者との社会的接触の機会を提供する」（田中ら2007a）、「誰でも訪れることがで

きる、気楽に立ち寄ることができる、自由に過ごすことができる、多世代との交流を図る機会がある、多様なニーズに対応できる、地域の問題解決を図る」(倉持)といわれている。また、「地域の居場所」は、コミュニティ・カフェとほぼ同じ意味で使われている。さわやか福祉財団(2008)では、「地域の居場所」の定義を次のように行っている。「地域に住む多世代の人々が自由に参加でき、主体的に関わることにより、自分を生かしながら過ごせる場所。そこでのふれあいが、地域で助け合うきっかけにつながる場所」。群馬県佐波郡玉村町で行われたシンポジウムのパンフレットでは「ふれあいの居場所」を、「いつ行ってもいい、誰が行ってもいい、そこで何をしてもいい、自由なふれあいの場です。地域に暮らす人が集い、ふれあうことで人と人とのつながり、あたらしい「関係」をつくり、助け合うきっかけとなる場所」として紹介している。

コミュニティ・カフェの最大の特徴は、ここに来ることで「新たな知り合いができる」ことである。倉持の調査によると、「ここで新たな知り合いを得られるか」という設問に対して主催者側は、46%が知り合うと答えている。利用者への調査では「ここに来て新たな知り合いができた」と答えた団体は、8～9割にものぼっている。これは、従来のコミュニティセンターや一般の飲食店では実現することのできない効果である。

そして、この新たな知り合いの得られる場を実現しているのが「場が開かれている」ことにある。ここで「開かれていること」は、外見上だけでなく、利用する人々の他者とのかわりをも開くことを意味している。田中・鈴木ら(2007b)は、コミュニティ・カフェの特徴は、「開かれ」にあるとし、「開かれ」を「ある場所に自由に出入りできるだけでなく、他者との関係においてその場所に居られるとき、この場所はその人に対して『開かれ』ている」と捉えている。このような「開かれ」を可能にしている秘訣の一つが、「主」の存在である。「主」とは、スタッフやコーディネーターのことを指す。利用者の様子を見ながら、時には利用者の話し相手になったり、利用者同士を紹介し、人と人がつながる媒介者の役割を果たしている。利用者を利用者を緩やかにつないでいくことで、他者との関係においてその場所に居ることができる(田中・鈴木ら:2007a)。このように、外界にも自分の心の中にも開かれた場があることで、人々は新たな人との出会いを経験し、新たな友人とのつながりを育むことができる。

## 2) 一般のコミュニティ・カフェとの共通点

子どもから障害者・高齢者の居場所づくりとしてはじめたコミュニティ・カフェ「近隣大家族」の利用者はいまや年間8,000人にも上る。田中ら(2007a)は、一般のカフェとコミュニティ・カフェの特徴を、表-1のように整理している。これに照らして、一般のコミュニティ・カフェと共通した特徴として、以下のような事柄があげられる。

### ①人が集まりやすい場所にある

棟高町にある拠点は、郵便局の隣にあり、人が集まりやすい場所である。1階にあるの

で足の悪い人でも入ることができる。

## ②複数のグループがお互い干渉せず活動ができるスペース

表-1の一般カフェの⑤にあたる。室内は間口が12m、奥行9mで面積108㎡と広いスペースが確保されているので、いくつかのグループが、集まっても、お互いを気にすることなく同時に活動を進めることができる。

表-1. コミュニティ・カフェと一般のカフェとの比較

一般のカフェとの共通点	コミュニティ・カフェ独自の特徴
① 回数多く開かれている	⑥ 地域とつながりをもつ
② お店であり、飲食を提供	⑦ 自分なりに関わられる余地
③ 予約なしでも来れる	⑧ 事後的に運営内容が形成
④ 対象者が限定されない	⑨ 関係が固定的でない
⑤ 過ごし方が決められていない	⑩ 多様な社会的接触が許容

田中康裕、鈴木毅、松原茂樹ら「コミュニティ・カフェにおける『開かれ』に関する考察」図5より作成



写真2: 近隣大家族の外観 (写真: じゃんけんぼん提供)



写真3: カフェのメニュー (2014.8.)

## ③カフェとしての機能

表-1の一般カフェの①②③にあたる。月曜から土曜日の間は毎日開かれ、安くて栄養満点の昼食が450円(2014年8月時点)で食べられ、200円でコーヒーが飲めるカフェとしての機能を備えている。予約なしに一人でもぶらりと立ち寄ることができる。

## ④思い思いに過ごせる場の提供

表-1の一般カフェの④⑤、独自の⑩にあたる。食事と喫茶だけでなく、活動スペース、作業スペース、イベントスペースとしての機能を併せ持つ。訪問時には、8人の若い母親と3人の子どもが真ん中のテーブルで、楽しそうにコーヒーとお菓子を楽しんでいた。母親たちがおしゃべりに夢中になっている傍らには、顔にタオルをかけられ、お人形のようにすやすや寝入っている幼児の姿がみられた。部屋の奥では、高齢の女性たちが後述する「タオル帽子」づくりに励んでいる。訪問するたびに、畳を敷いた横長の椅子で昼寝をしている人を見かけた。大人でも眠ってしまいたくなるような安心感がただよっている。



写真 1：「近隣大家族」に集う幼児をつれた母親たち

### ⑤何時間でもいれる居場所

表-1の一般カフェの⑤にあたる。日本茶は無料で提供され、好きなことをして何時間でもすごすことができる。一人でもくつろげ、仲間とも楽しめる場所になっていることがポイントである。コーヒーとお菓子が楽しめることで、幼稚園児をもつ若い母親たちの憩の場にもなっている。人が人を呼んでくる。食事と飲み物の提供は、この場に足を踏み入れるための呼び水の役割を果たしている。

### 3) 人々を元気にする独自のコミュニティ・カフェの展開

じゃんけんぼんは、HPの中で、目指す居場所づくりについてこう記している。「高齢者がいつまでも健康で介護を必要とせず、住み慣れた地域で生活するには、高齢者がもっとも望む『地域の人々との温かいつながり』すなわちコミュニケーションの機会を提供することが重要です。特に独居高齢者や高齢者世帯では、家に閉じこもりがちになり、精神的にも肉体的にも弱ってしまい、要介護の状態に陥りやすくなってしまふ為、いつまでも楽しみと生きがいを持ちつつ元気で暮らせるために日常的な出会いをつくる場や機会を意識的に創っていく必要があります。そこで徒歩圏コミュニティとして半径1kmの範囲内に『近隣大家族』という拠点をつくり、介護予防のための活動・たまり場としての利用・居場所づくり・子供とのふれあい・趣味創作活動等の場を提供します。」このように、高齢者が、いつまでも楽しみと生きがいをもって元気でくらししていくために、介護予防のための活動、居場所づくり、子供とふれあえる場、趣味創作活動の提供を目的としており、虚弱な高齢者だけでなく、高齢者、子供、その保護者のニーズに的確に応えられ、「元気になる」心の居場所づくりを目指している。

コミュニティ・カフェの手法を用いた「近隣大家族」における趣味創作活動、高齢者や

子供、保護者の居場所づくりに関する内容と、介護予防や福祉的機能に関する内容にわけ、その特徴を明らかにしていく。

#### 4) 趣味創作活動、高齢者や子供、保護者の居場所づくり

##### (1) 「はらっぱ」としての活用と「ディズニーランド化」を交互にしかけ人々の関心を引く

年間8000人余りの人々が集う「近隣大家族」では、「はらっぱ理論」と「遊園地：デズニーランド」化という異なる手法を、意図的にそして効果的に使いこなしている。

「はらっぱ理論」とは、青木淳(2004)による『「はらっぱ」と『遊園地』』を指す。青木は、建築とは「あらかじめそこで行われることがわかっている建築(遊園地)とそこで行われるその中身が作られていく建築(原っぱ)の二種類」としてしている。田中ら(2007a)は、建築をコミュニティ・カフェに置き換え、利用者がお客様としてではなく、自ら主体的に遊びを発見して創り出していく主体者の楽しさを重視する点に着目し、これをコミュニティ・カフェ独自の特徴としてあげている。同様の考え方を井上謙一理事長ももち、人々が集まる場にするための方法について、次のように述べている。「いつも満員のアミューズメントパークのように主催者が企画運営して、集まる人はいつまでもお客様という考え方ではなく、草ぼうぼうの広場で『今日何する?』『今日は鬼ごっこ』『かくれんぼ』と考えて遊ぶ、そうお客様ではなく当事者として参加するといういわゆる『原っぱ理論』です(べんけい草 Vol.114)と語る。「インフォーマルサービスは専門職が主体で進めても全体的にうまくいきません。(中略)主体は当事者である地域住民が進めたほうがうまくいくということです。NPOとしてはその場と機会を提供し、トラブルを防止するコーディネーターに徹するという事です。互助・共助のコーディネートには、住民主体の視点が重要で、住民自らが楽しく参加して、生きがいにつながる仕掛けをつくっていくことが必要だろうと思います」

しかし、人々に拠点の存在が知られていない開設当初では、地域の話題になるような催しを開催し、「ディズニーランド化」をしかけた。お笑い芸人の講演会や、日替わりランチや歌声喫茶などの企画を充実させ人を呼び寄せた。しかし、これらはあくまで「呼び水」である。このような人寄せパンダを登場させ人の流れを作った後、しばらく「放って」おく。そして、集まってくる人が固定してきたと思う時には、また新しい企画を投げかけ新たな参加者を呼び込む。「はらっぱ」と「ディズニーランド化」を交互にしかけることで地域の人々の関心を拠点に引き付けていった。

##### (2) つながりの場づくりをリードするコーディネーターの存在

「近隣大家族」は、一人でぶらりとコーヒーを飲んだり食事ができる場である。民生委員のサロン活動にも使われている。来訪者のしゃべくりパワーによる口コミで利用が広がっていく。地域の人たちは「何だかわからないけど、お茶が飲めるし、好きなことができる」と受け止めている。カフェとして利用する人がいる傍らで、日々のプログラムが行

われている。

基本的に、プログラムの内容を決めるのは来訪者であり、来ている人々の参加したい内容がプログラム化される。コーディネーターの目崎智恵子氏は、通ってくるようになった一人ひとりに何がしたいのかを訊ね「自分たちがやりたいことをどんどんやってください」と呼びかける。そして、出された企画を1月分のカレンダーに埋め込む。「体操を少し入れてみましょう」と提案もしていく。やりたいことが決まったら、予定表に書き込む。1月のカレンダーに予定を載せる意味は2つあるという。一つは、時間割として埋め込むことで、プログラム同士がぶつからないように交通整理を行うこと。もう一つは、このカレンダーにプログラムが書き込まれた通信を地域に配布することで、個人の企画が地域の企画となり、開かれたプログラムとしての意味をもつ。活動に参加したいと思った人は団体に連絡をしたり、当日ぶらりとやってきて、活動の様子をみたりする。コーディネーターは、新しい参加者が入りやすいように声をかけていく。新たな参加者が加わり、固定しがちなメンバーに新しい風が吹きこまれる。

さらに、コーディネーターは、この場所でおくるトラブルを防止する役割を担っている。1つの企画で、2つのグループが出来てしまった時には、双方のグループの言い分を伝え、一緒にやっていくよう働きかける。まさに、コミュニティ・カフェの主の役割を果たしている。

### (3) 一人ひとりに向き合うことが、人のこころを動かす

人々が興味のもてる企画とは、どのようにつくられていくのであろうか。目崎氏は、「近隣大家族」へ通う一人ひとりの来訪者に何がしたいのか訊ねる。ここでは、やりたいことを聞き出す力が求められる。実際に人と接しながら、彼女が学んだ方法は、「一人ひとりに聞いていく」ことである。この方法は、お願い事をする場合にも効を奏している。例えば、ここに通ってくる認知症の方へ「一人でぼつんとしている時には、声をかけてほしい」と周りにいる人へ頼む場合も、大勢の人の前で話した時には受け止めてくれる人は少ないが、「一人ひとり」に話しかけると、実際に声掛けをしてくれるという。この地域では「しみる」という言葉がある。「心にしみる」「心に届く」という意味である。やりたいことを聞いたり、お願いごとをする際には、一人ひとりの「こころ」へしみるように、「一人ひとりに話しかける」ことが大切なのである。

### (4) 趣味、イベント、健康関連活動がバランスよく配置されるプログラムの工夫

コーディネーターが中心となり、プログラム企画に力がいれられている。予定が書き込まれた2015年4月のカレンダーをみると多様なジャンルの魅力的なプログラムが埋め込まれている。

午前で一コマ、午前午後なら2コマとして、各種のプログラムをカウントすると、趣味活動が47.2%、次いでイベントが30.6%、健康情報が22.2%となっている。趣味活動

が一番多く、半分余りを占めているが、その中身は、詩吟の会（月2回）、囲碁将棋（月4回）、カラオケ（月2回）となっている。ここに、来訪者の希望が活かされている。

イベントは、3割を占めるが、多彩である。アコーディオン演奏会（月1回）、懐かしの映画会（月1回）、そして手作り品バザーが不定期に催されている。

さらに、食に関連したイベントも開かれ、パンの販売が月4回、飲み物半額ディが月2回企画されている。そして健康福祉情報等も充実させている。認知症カフェとして、認知症の方を抱える家族の相談、認知症に関する情報を提供する日が定期的にもたれている。近隣の医院から医者が出張して漢方の話をしてくれ、体を動かすプログラムとして「ゆるり体操」と「ラフターヨガ」が月1回企画されている。このようにイベントや健康情報がバランスよく盛り込まれている。

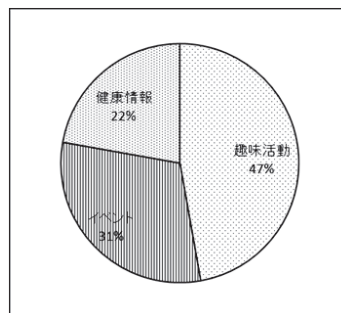


図-2 プログラム構成（2015年4月）

#### (5) よい企画がでてこない時は、他団体の知恵を借りる：他者貢献プログラムの取り組み

人が人を呼んでくる。毎日通ってくる常連さんができてきたので、「簡単ですぐできて楽しいものはないかな」と思っていたが、なかなかよいアイデアがわからない。そのような時は、他団体から知恵を拝借。さわやかサロンとのネットワークで仕入れたアイデアで、抗がん剤治療で髪の毛が抜けてしまった人のためのタオル帽子づくりに取り組んでいる。素材がタオルなので、肌触りが柔らかく通気性がよいため患者さんに喜ばれる。1人が1週間に3個は必要とのことで、「タオル帽子」は大人気である。また、タオル1枚で簡単に作れるので取り組みやすさも魅力である。岩手ホスピスの会から型紙を買い、講習会に参加し、習いながら作成している。地域の病院へ無料で配り、大変喜ばれている。病院では、患者としては入ることのない立派な応接室に通され、丁重にもてなされる。他者へ貢献しているという思いに加え、このような非日常の体験が、作り手のモチベーションをあげる。バザーで販売することになり、作成に一段と力が入る。お金を得ることは眼中になく、その売り上げで、材料のタオルを購入し帽子づくりに励んでいるという。

#### (6) 個別ニーズをイベントへ発展させる

次の(7)で後述するが、高齢者のお宅には、捨てられないモノが積み積もっていることが発見され、若い母親たちがそれを貰い受け、小物づくりに役立てられている。この各家庭に眠っている不用品に着目し、イベントにしたのが「もっていきん祭」である。3月のカフェ通信にはこう紹介されている。「捨てられない・・・譲りたい!」「そんな品物をお持ちで、下記のルールを厳守できる方は、品物を持って、当日10～11時半に近隣大家族へお越し下さい。もちろん貰いたいだけの人も大歓迎!!」「参加ルール」は、次の



ようである。

- ① 物品提供に対し、お金を請求できません。
- ② 食料品は賞味期限内の常温保存可能な物で、当日担当者がOKしたものに限り譲渡できます。
- ③ 一枚の広げた新聞紙の上に乗る分だけお持ち下さい。
- ④ 強引に引き渡してはいけません。
- ⑤ もらい手のなかった物は、責任をもってお持ち帰り下さい。

一つのエピソードから、地域の資源とニーズを理解し、イベントに仕立てあげてしまう企画力には驚かされる。

## (7) 共生型の拠点づくり

### ① 若い母親の心をつかんだバザー製品作成の作業場としての活用

コーヒーやお菓子が楽しめることから、幼稚園児をもつ若い母親が集まりだした。一方、この居場所の維持費を生み出すために、年に数回、バザーを行っている。売上の2割を「近隣大家族」の維持費として寄付してもらうためである。毎回盛況で、様々な手作り品が売られ、バザーは地域の人たちの新たな楽しみになっている。このバザーが、お小遣いを得られる方法として、若い母親たちの心をつかんだ。若い母親は仲間同士で相談し、何を作れば利益があがるか検討を始めた。もちろん作戦会議の場は、この近隣大家族の大テーブルである。バザー開始の前は、カフェが手芸工房に早変わり。仲間といっしょに針仕事をする事自体が楽しい。一方、高齢者は、長年のくらしで物が溜まり、さらに捨てるパワーが下がってしまっている。高齢の利用者から、手芸の材料となるタオルや布が納戸にしまわれていることをコーディネーターが聞きつけ、若者に伝える。若い母親たちは、高齢者の家を訪ね、布だけでなく、庭でとれた果物など沢山のおみやげをもらって帰ってくる。もらいっぱなしでは心苦しいと、自分の車に高齢者を乗せ買い物を手伝うなど、自然な助け合いが生まれている。井上理事長は「ごちゃませネット」と呼ぶ。高齢者の積み積もった所持品が、若い世代とのつながりを創り出していく。家庭に眠っている不用品を通した「つながり」が新しい近隣関係の可能性を拓いていく。

### ② こどもたちへ居場所を提供

「近隣大家族」は、子どもの情操教育の場としての「寺童屋（てらこや）」の機能ももっている。夕方18時以降は、子どもがこの居場所を使える時間。他の人に迷惑をかけないよう静かに過ごし、1回に100円を払えば利用できる。親の帰宅の遅い家庭の子どもの居場所として提供されていた。ここの管理者は、青少年自然学校に毎回参加している大学生のO君である。子どもたちは、O君に会いにやってくる。相談相手としてO君へ深い信頼を寄せていた。しかし、彼の就職を機に、2015年4月以降、この「寺童屋（てらこや）」は閉じられている。

この「寺童屋（てらこや）」の実践は、相談場所がほしいという子どもたちのニーズを明らかにした。また、夕方の時間を子どもたちに開放するというアイデアは、今後の共生型のカフェづくりに対して、活動のヒントを提供しているといえる。

もう一つの居場所、金井淵のコミュニティ・カフェでは、こどもたちの居場所を意図的に創りあげている。8月の最後の1週間は、カフェ通信に「宿題週間」と名付けられた。カフェの一角に、小学生が夏休みの宿題をもって机に向かっている姿がみられた。周りの人たちも、「宿題週間」だからね、と子供の姿をやさしく見守っている。また、プログラムに妖怪ウォッチの籠づくりが企画された。かわいい籠の気持ちは高く、15組以上の親子で賑わったそうである。子どもや親子で参加したいプログラムを盛り込むことで、子どもたちにも馴染みの場になってもらえるようしかけている。

## 5) 福祉機能・助け合い機能の付加

じゃんけんぼんのコミュニティ・カフェは、上記のように充実したプログラムという特徴があるが、さらに、認知症を中心とした福祉事業を行っている、居宅介護支援事業所と併設している強みを生かし、福祉的機能を盛り込んでいるところに、もう一つの特徴がみられる。

### (1) 災害支援機能

2011年3月の東日本大震災は、棟高町のコミュニティ・カフェが開設したての時期であった。近隣から、救援物資を持ち込んでよいかという相談をうけ、急きょ災害支援拠点としての活動を開始した経緯がある。当時は、開設したばかりで、利用者は一人もいないという日々が続いていた。天から与えられた災害時の支援拠点としての役割を得て、この拠点が地域の人々に知られていく。復興支援の活動として、現在でも募金活動を継続している。

### (2) 会食サービス・ミニデイサービスとしての機能

ハード面やサービス面での魅力だけではない。障害をもった人たちへの見守りができるケア力を備えているのがこの拠点の特徴である。隣が事務所でケアマネージャーやスタッフが常駐しているので、どのような人が来ても対応ができる。実際に、見守りが必要な認知症の人も来所する。小規模多機能の利用者も、当組織の車に乗ってお昼を食べにやってくる。この拠点は、元気な人たちが、楽しめるだけでなく、障害をもった人たちも安心してすごせる、地域の見守りの拠点となっている。

### (3) 認知症カフェ

「プログラムの紹介」で前述したが、ケアマネージャーの事務所である居宅介護支援事業所を併設している強みを生かし、認知症への相談にのっている。認知症のご本人も含

めたカフェ（ディーズ・カフェ）を月2回、介護者専門のカフェ（ケアラズ・カフェ）を月1回開いている。ディーズ・カフェでは、認知症のご本人、介護者、認知症について聞きたい方・話したい方など、だれでも参加できるようになっており、お茶を飲みながらの気楽な交流が行われている。ケアラズ・カフェでは、介護等の悩みやグチや実践体験を「話せる・聞ける・吐き出せる」しゃべり場を介護者へ提供している。

#### **(4) 地域の見守り情報や困りごと情報が集まってくる：情報のハブ機能**

人々が集う中で、地域の困りごとの情報も寄せられるようになっていく。泣き叫んでいる子どもの声が聞こえたとか、Aさん宅のお婆さんの様子が最近おかしいといった見守りに関する情報が寄せられている。地域の人々が集える場の開設は、情報のハブ機能を備えることになり、見守り拠点としての機能も発揮している。

#### **6) 助け合いに参加する人材を育てる機能**

井上理事長は、「仲間と一緒に自由な発想で楽しんでほしい」という。高齢者が元気で暮らし続けるには、「居場所」と「役割」が必要になると考えている。始めて訪れた人には「気に入ったらまた来て、元気になって、そして手伝ってください」と声をかけている。じゃんけんぽんのコミュニティ・カフェの最大の特徴の一つは、人々が居場所をつくり、楽しみや人とのつながりを得ることで元気になるだけでなく、担い手として助け合い活動に参加することを期待しており、その機会を提供していることである。この担い手としての参加の機会として、配食サービスの調理や配達、家事援助の活動を位置づけている。次の章から、それらの一つである配食サービスについてとりあげていく。

## **2. 見守りを主目的にした配食サービス**

### **1) 見守りを主目的にした配食サービス**

「じゃんけんぽん」の配食サービスは、その主目的を「見守り」においている。配食サービスは生活支援の一助として、1992年の国庫補助開始以降、全国レベルで本格的な普及が図られてきた。1992年の全国社会福祉協議会の報告書では、生活支援の食事サービスの主目的は「食の提供」、安否確認や担い手等とのふれあいは、二次的目的と明確に位置づけられている。一方で、2015年4月から実施されている第6期介護保険事業計画では、「介護予防・生活支援総合事業」では、「その他の生活支援サービス」において、配食サービスがとりあげられており、「栄養改善を目的とした配食」と「一人暮らし高齢者に対する見守りとともに行う配食」といったように、配食の目的に栄養改善と見守りが併記されている。食の提供と合わせて安否確認の重要性も認められるようになっていく。

このような中、じゃんけんぽんは、通常のとらえ方ではなく、「見守り」を主目的にした配食サービスを展開している。当団体のHPでは、配食サービスの目的を「配食をきつ

かけに在宅のお年寄りとの日常的なコミュニケーションを図り、それによって話し相手、安否確認、認知症などの予防や早期発見、その他の問題に関連する生活の変化に気づくこと」としている。

## 2) 見守りは現代の課題の一つ

一方、「見守り」は、高齢化の進展、高齢単身および高齢者のみ世帯の増加、地域の関係が希薄化する中で、孤立死や孤独死の問題、問題を抱えながらも援助を求められない人々が増え、大きな地域課題の一つとなっている。このような状況から、本人とは必ずしも直接面識のない、地域住民による見守りまでもが期待されるようになってきている。

見守りには、特定の見守員が訪問・電話等を定期的に行って見守る「積極的な見守り」と、日常生活の中で近隣を気にかけて、周囲の状況から安否を確認する「さりげない見守り」（東京都、町田市）があるとされている。また、見守りには、①異変の発見や気づき、②相談と通報、③緊急性判断、④支援活動という4つのプロセスがある（小林，2013）とされ、①異変の発見や気づきでは、どのレベルになったら「異変」とするかの判断は必ずしも簡単ではない。日頃の状況を知り、変化に気づける関わりが必要とされる。一方、近隣住民が何らかの異変に気づいて誰かに知らせたとしても、結果的に何もなかった場合には苦情を言われるだけでなく、個人のプライバシーに立ち入ったことを非難される可能性がある。ある変化や異変がどのレベルのものであるかの判断については、当人と発見者との間の日常的な空間的、時間的、心理的距離が大きな意味を持っている（小林，2013）。また見知らぬ人に見守られているということは、受け入れにくいことである。むしろ見張られているといった抵抗感を感じかねない。このように、通常、見守りは心理的距離の近い人信頼関係があって初めてなりたつものと思われる。

## 3) 配食サービスがもつ見守りに適した特性

このように考えると、配食サービスは、とても自然で強力な見守りの手段である。見守りは、周囲から見守る「さりげない見守り」と、直接顔をあわせる「積極的な見守り」があるとされている（町田市見守り支援ネットワークマニュアル）。配食サービスは後者の「積極的な見守り」を自然に行うことのできる方法である。人は「お弁当が届くこと」を望んでいるので、自ら進んで玄関の扉を開ける。高齢者を狙った詐欺が横行している中、見知らぬ人へは扉を開けないのが通常である。配達者は、弁当の手渡しを通して本人と直接会うことができる。顔色、表情、玄関まで出てこられるか、声のトーンなどによって、本人の心身状態を気遣うことができる。また、直接的な金銭の授受があれば、数字の計算ができるかどうかも見ることができ、認知症の早期発見につなげることができる。さらに、同一の配達者が定期的に訪れる場合、日常的な変化を読み取ることができ、異変の発見が可能となる。

“じゃんけんぽん”は、このような見守りに適した配食サービスの特徴を生かし、見守

りを配食サービスの第1の目的としている。対象となるのは、虚弱な単身か夫婦の高齢者、日中独居ないし二人の高齢者であり、ケアを行う専門職の目から見て、見守りを必要とされる人々である。サービスの入らない主に昼間の時間帯の見守りを、配食サービスの提供を通して可能にしている。

#### 4) 見守りを強めるための“じゃんけんぼん”の工夫

##### (1) 値段への配慮と高崎市の補助制度の活用

第1の特徴は、値段への配慮である。提供する食事の中心は、1食700円の手づくりで栄養バランスのとれた「こころまち弁当」である。が、おかずのみの600円弁当を用意しているだけでなく、値段の高さが見守りを伴った利用の妨げにならないようにと、おむすび1個と味噌汁と副菜で300円、おむすび2個と味噌汁で400円の「見守り縁結び」弁当も用意している。

この「値段」という利用する際の障壁を低くする点で、力強い後押しになっているのが、高崎市の配食サービス制度である。市の条件に該当する希望者であれば、補助なしでは700円のお弁当を250円で利用することができる。

高崎市は、平日の昼食を対象に一日1食最大5回まで食事を自宅まで配達する「給食サービス」を行っており、「栄養バランスのとれた昼食を定期的に配達するとともに、安否確認なども行う」ことを目的としている。対象者は「自分で食事の用意を行うことや、家族などによる食事の援助を受けることが困難な人で、①65歳以上の人、②ひとり暮らしや共に高齢なふたり暮らしまたはこれに相当する世帯の人、③給食サービス希望日に、他の介護サービスを受けていない人、のいずれの条件にも該当する人」である。

利用しているお弁当の種類であるが、2014年8月時点の利用者30名のうち18名が市の補助を利用しており、その他では「こころまち弁当」が5名、おかずのみが5名といった状況である。2名が市の補助弁当と「こころまち弁当」を併用している。この時点では「見守り縁むすび」弁当の利用者はみられなかった。このように、市の補助制度が見守り配食の利用を後押ししていることがわかる。

##### (2) 配達時に、頼まれごとを積極的に行う、これまでの常識を覆す内容

第2の特徴は、玄関先でお弁当を渡すのに留まらず、家の中に入り、ちょっとしたお手伝いを行っていることである。コーディネーターの目崎氏はその様子をこう語っている。「当法人の配食サービスは、配達の際には、ただ単にお弁当を置いてくるということは決してせず、ご利用者のご自宅に10～15分滞在してコミュニケーションを図り、相談相手、安否確認、生活の変化の気づき、バイタルチェック、服薬管理等を行います。訪問によるふれあいを通じて、認知症の早期発見、体調や生活の変化に気づき、必要に応じて公的サービスや他の社会資源につなぎ、時には社会参加のきっかけとなる情報提供を行うことで、住み慣れた地域で自分らしく在宅生活が続けられることを目的としています」

実際、配達に同行させてもらったが、じゃんけんぽんの配達は、玄関先でとどまるものではない。ずんずんと家の中にあがり、箸やお水を用意したり、服薬を勧めたり、雨戸をあけたりとちょっとしたお手伝いを行っている。利用者一人ひとりの生活の状況、どこで食事をするのか、どのような援助を求めているのか、さらには近隣との関係についても熟知している。お弁当の手渡しにとどまらず、利用者の生活全般を把握し支援しているのだ。

このような方法は、通常行われている配食サービスでは考えられない。配達時の「ちょっとしたお手伝い」を目的の一つにしている団体をこれまでは見たことがない。実際には、配達時間を心待ちにしている次の利用者を思うと、ゆっくりと話をする時間がとれないのが通常である。一方、利用者は日常生活に不自由を抱えている人が多く、定期的に訪れてくれる来訪者に、頼みごとを用意して心待ちにしている場合も少なくない。自分でビンの蓋を開けられないので、玄関先にビン詰を並べている人、手紙の投函を頼む人、脚立を用意して筆筒の上のものをとってもらおうとする人、様々な頼みごとが配達者を待ち受けている。配達者は、個人の善意として、限られた時間の中で、密かに頼まれごとに応えているのが通常である。利用者と配達者の間だけで了解されている公にはされない行為として扱われていることが多い。配達時には、配達以外の行為は、控えるようにルール化している組織すらある。このような「頼まれごと」を、組織として、活動の目的にあげ、積極的に行っているのが、“じゃんけんぽん”の配食サービスであり、今までの常識を覆す行為と捉えることができる。

またこのような玄関先での受け渡しに留まらず、家にあがった配膳という配達スタイルは、家にあがってこたつを囲んでお茶のみをすることが自然な群馬県高崎市のコミュニケーションの有り様が、背景にあるように思われる。

### (3) 昼食時に配膳と下膳の2回にわたって行われる訪問

第3の特徴は、昼食時の配達においては、配膳と下膳といったように、2回にわたる訪問を行っていることである。下膳も行うことで食事量がチェックでき、食欲不振や体の不調をいち早く捉え、健康チェックを行うことができる。

高崎市の制度が昼食を対象としていることもあり、利用者の87%が昼食を利用している。制度を活用すると週5回の利用が可能なおことから、1週間の利用食数は、5食が10名と一番多い。続いて2食が9名、3食が4名、1食が3名、4食と6食と8食が各々1名ずつである。

12時前後の日中の真ん中にあたる時間帯に、週数回の手厚い見守りが入ることは、日中は仕事をし、外出している家族へ安心感をもたらすだけでなく、不安な一人の暮らしを見守るケアマネージャーや地域包括支援センターの職員にとって、最も利用したいインフォーマルのサービスとして、有効な地域資源となっている。

## 5) “じゃんけんぼん”の配食サービスの基本的特徴

### (1) 食事内容

見守りを第一の目的にしているが、提供される食事にも真心がこめられている。ご飯は普通食とおかゆ、副菜は常食から刻み、超刻み、とろみ等が選べるようになっている。塩分制限とカロリー制限、アレルギーへの対応も行われ、食べられないものへの配慮や代替食も行っている。おかゆの人も2名いる。副菜は全員が常食で超刻みの人はいない。塩分制限を必要とする人が2名いる。このように利用者の健康状態に配慮した個性性を重視した食事が提供されている。

### (2) 会食も実施

さらに、本人が希望すれば、近隣大家族のランチ450円(2014年8月時点)に100円をプラスすることで、送迎付きの会食サービスを利用し、コミュニティ・カフェのある「近隣大家族」ですごしたり、そこで昼食を食べることができる。5名が拠点での会食サービスを利用しており、内1名は、配食サービスを併用している。

### (3) 担い手

管理栄養士が1名常駐し、調理ボランティア4名で昼食を45食、夕食時は8食を調理している。調理の登録者は16名であり、キッチンボランティアと呼ばれている。月曜日から金曜日の5日間の昼食と夕食の2食を提供している。調理ボランティアは、8時30分から13時30分までの5時間で、交通費込みで1日1,000円の謝礼が支払われる。

### (4) HOT けんサポーター

配達ボランティアは「ほっとけんサポーター」と呼ばれており、2014年8月時点では10名が登録している。男性5名、女性5名であるが、うち3名が元介護職関係者、元民生委員、障害者支援関係者と福祉関係者が含まれている。10～14時までが昼の部、16～18時30分までを夜の部とし、各々一人1000円を謝礼としている。2014年8月25日は、昼食の配達分は16食を3名で、夕食分は4食を1名の配達ボランティアが担当していた。配達の登録者は16名であり、一名が4～5食配達する目安になっている。2015年8月の通信では、「1件につき約10分1人10件を目安に、利用者の話し相手になり、利用者の安否確認をしながら、お弁当を届けます」というように、配達内容が変更されている。限られたサポーターの中で、急増した依頼に応えるべく、配達時間の短縮と、配達数の増加が図られている。

## 6) ケアマネージャーに支持される見守り配食

このような「見守り配食」は、どのように地域に受け止められているのであろうか。2011年度から2014年度までの事業報告書に掲載された年間食数(延べ利用人数)をグ

ラフにしたのが図-3である。毎年2倍以上の伸びを示しているが、特に2013年度から2014年度は、2125食が5105食へと拡大し2.40倍の伸びを示している。短期間の間にその存在が知れ渡り利用されていることが示されている。



図-3. 2011年度から2014年度までの年間食数（延べ利用者数）

利用者の状況であるが、年齢は、75歳以上85歳未満が46.7%（14名）と多く、次いで65歳以上75歳未満が30.0%（10名）、85歳以上が23.3%（6名）と続く。女性が21名、男性が9名である。介護度は、介護保険の利用者は25名で、全体の75%を占めている。未認定が25%（5名）、要支援1が7名、要支援2が2名、要介護1が11名で最も多い。要介護2が2名、3が1名、4が2名である。このように比較的介護度の軽い、単身高齢者が主な対象となっている。

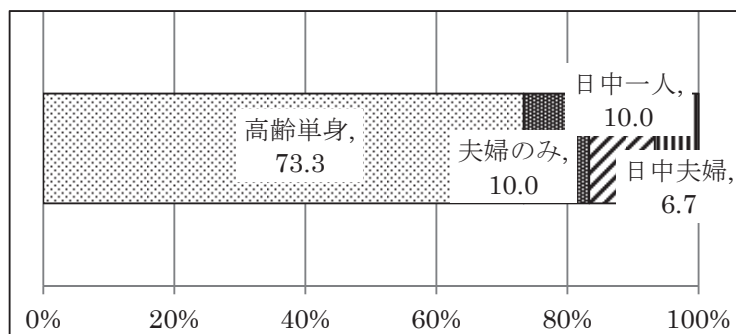


図-4. 配食サービス利用者数の家族形態

サービスの依頼者を見ると、一番多いのがケアマネージャーで43.3%（13名）にものぼる。次いで地域包括支援センターや在宅介護支援センターの職員からの依頼で33.3%（10名）を占め、保健福祉の相談専門職からの依頼が76.6%も占めている。家族・親族は23.3%（7名）にすぎない。

なぜ専門職からの依頼が多いのだろうか。それは利用者の家族形態がその理由を物語っ



ている。

高齢単身世帯が73.3%（22人）を大部分を占めており、次いで高齢夫婦のみ世帯が10.0%（3人）、5名が同居世帯である。同居世帯はいずれも家族が昼間は働いていて、日中高齢者のみとなる。つまり、全員が日中の見守りを必要としている人々である。

専門職が求めていた「見守り」とじゃんけんぼんの配食サービスのねらいが合致していることがわかる。

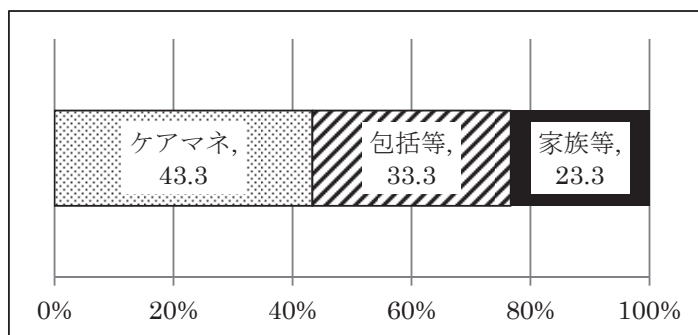


図-5. 配食サービスの依頼者

## 7) 「見守り」の目的を遂行するための記録作成とミーティング

### (1) 記録づくり

配達ボランティアは、配達後、居場所にもどり、利用者一人ひとりの様子を日誌に記録する。日誌には、配膳時と下膳時の記入欄が2つ設けてある。いつもと違う様子であれば、コーディネーターに報告する。報告を聞いて、コーディネーターが訪問の必要性を判断した場合は、担当のケアマネージャーか、緊急連絡先の家族か友人に連絡をいれる。ケアマネージャーと一緒に、自ら訪問することもある。コーディネーターは、ケアマネージャーと密に連絡をとりあい、利用者の生活全体の状況を把握している。このような丁寧な対応によって、利用者だけでなく家族が、じゃんけんぼんという組織に信頼を寄せている。

### (2) ミーティング

思いを込めた配達ボランティアの活動や思いが組織的な方針に反映させる場が、2ヵ月に一度行われるコーディネーターとのミーティングである。利用者を担当するケアマネージャーからの利用者をめぐる要望や、配達ボランティアからの配達時の気づきなど、忌憚のない意見が交わされる。配達ボランティアから、利用者一件10～15分の時間を確保するよう、コーディネーターが迫られているという。配達ボランティア自身が、利用者の生活を気遣い支援したいと願っていることが伝わる。自分たちの意見を仕組みに反映できることが、ボランティアの主体的な取り組みとやりがいとを可能とする基盤となっている。

そしてコーディネーターの存在と役割はたいへん大きい。見守りを重視した配食サービ

すが地域ケアに役立つかどうかは、コーディネーターの働きにかかっているといっても過言ではない。ケアマネージャーや家族との連携の結び目になるのがコーディネーターであり、彼らの働きかけによって「連携のとれた見守り」として、地域ケアの中で、利用者の最新の心身状況を把握し発信できる機能をもつ。

## 8) 担い手に与える影響と効果

配食サービスのもつ見守り力を生かし、さらに生活援助をプラスさせ利用者のくらしに深くかかわる生活支援の配食サービスは、担い手の「ほっとけない心」に火をつけた。運営者側が、当初想定していなかった出来事の一つではないかと思われる。心身状況が低下し、配食サービスから小規模多機能サービスに移行した際も、ボランティアとして、家族のように、近くの親戚のように訪問し、見守りを続けているというドラマが生まれている。「近隣大家族」ということばどおりの、親密な関係が築かれており、配食サービスは、担い手のボランティア力を育てる活動であることを実証している。

### (1) 利用者さんの最後の時まで、よりそったボランティアの物語

“じゃんけんぽん”の棟高町カフェ通信 2015年9月号では、コラム『住み慣れた自宅で生ききる』で、利用者のムツさんに最後までよりそったボランティアのかかわりが紹介されている。(【】は筆者挿入)「2011年春、ご主人が亡くなり、東京に通勤している息子さんと二人暮らしになってしまったムツさん。(中略)昼の食事を届けて欲しいとご相談をうけ【配食サービスの利用が始まりました。】(中略)弁当は月曜から金曜。毎日昼の弁当を届け安否確認・見守りを行いました。ご主人が亡くなって間もない為、持って行った弁当を仏壇に置き、ボランティアさんも毎日、お線香をあげさせて頂きました。毎日違うボランティアさんの名前も一人一人きちんと覚えて下さり、ご主人の話や昔の写真を見て、お話にも花が咲くことも多かったです。(中略)日常生活に支障が出てきて(中略)、配食の見守りだけで支えることが難しくなり、小規模多機能型居宅介護を利用開始しました。しかし(中略)【小規模の職員に】なかなかなれることができず、しばらくは配食サービスのボランティアさんが小規模の職員と一緒に訪問し、少しずつ(中略)慣れていきました。【配食サービスを開始してから三年たち、小規模の配食へと移行します。】小規模の利用になっても、『小規模に時々顔を見に伺いお話をする』、『時々自宅に訪問してお話をしてくる』などボランティアさんは関わりを持ち続けていました。【そして、食事があまり摂れなくなりベッドで寝たきりの状態になってしまった時には、】ボランティアさんが、できるだけムツさんと一緒に過ごそうと代わる代わるご自宅に顔を見に伺いました。息子さんが買い物に行く時間は、留守番をしてムツさんに話しかけていました。(中略)そして食事がほとんど摂れなくなって三週間、真夜中に自宅で眠るように息を引き取りました(享年八十三歳)。亡くなってからもボランティアさんは息子さんがお寺の手配や葬儀の準備の為、自宅を留守にする際は、(中略)ムツさんの傍らでお茶のみをし留守番をし

ていました。」そして最後に「配食を通して知り合った人たちが最後まで一緒にいる。本当に皆さんの力はすごい」と結ばれている。

## (2) 担い手の「ほっとけない」心を育てる

配達を行っているボランティアにとって、家の中にあがって手伝いを行う配食サービスはどのように捉えられているのであろうか。外出が困難な利用者に対して、お弁当を届けるだけでも感謝されるが、さらにお話をしたり、ちょっとしたお手伝いをする事で、利用者との信頼関係が深まっていく。このことは、活動への大きなやりがいや手ごたえに繋がっていく。自己の有用感を高めることのでき、配達者自身が元気になれるという側面が存在する。

田中ら（2007）は、行政が主催し配達を地域住民へ依頼している配食サービスの配達ボランティアへの調査を行い「単なる配達業務だけに留まっていないこと」を示している。「地域住民によってお互い様の意識で成り立つこの活動は、宅配はいわば訪問の機会作りの機能を持っていること」を指摘している。「実際は、かなり多様なソーシャルサポートの提供活動に発展している。弁当配達の折には高齢者の様子を見ていたり、ついでに数分の世話をすることは頻繁である。場合によっては話し込んだり、相談を持ちかけられたりする。会話を通じた支援が主ではあるが、家事など配達以外の用事をしたり、外出の付き添いなど、配達とは関係のない支援をする例も、少数ながらみられた」と報告している。さらに、「現実にはたとえサポート提供の機会が少なくても、機会さえあればあげたいという意欲が高いこと」を明らかにしており、「人への深い関与によって成果を得ることが、更に活動を定着させて、更なる成果にも結びつくという、循環的な面」を指摘している。

じゃんけんぼんの配食サービスは、この「人への関与」を公の目的として、いかに発揮してもらおう機会を提供している。まさに、ボランティアのほっとけない心に、さらに火をつける活動といえる。まちでは出会うことが難しい虚弱な人々に直に接することで、助けを必要としている人の存在を身近に感じる事ができ、目の前の困っている人を支援しようとする他者支援の気持ちが喚起される。まさに、ボランティア心を刺激し、育てる役割を配食サービスが担っているといえる。

## おわりに

これまで見てきたように、じゃんけんぼんは、数々の新しい実践を展開してきた。これらの取り組みは、次のように3つの特徴としてまとめることができる。

一つは、居場所への地域の人々の参加を促すことで、認知症にならないまちづくりを進めてきたことである。介護予防としての取り組みともいえる。居場所は、従来のコミュニティ・カフェの手法を用いながら、新たな手法を開発している。プログラム中心の企画を

盛り込むことで、集客力の高いコミュニティ・カフェを可能にし、さらに、福祉事業を行っている強みを発揮し、コミュニティ・カフェに福祉的機能をもたせ介護予防機能を強化させたことがあげられる。

具体的には、図-6 にまとめたように、居場所、楽しさ、つながりの面からは、プログラムの充実や、多世代がつどえる共生型の居場所づくりが、その特徴としてあげられる。福祉的機能付加の面からは、ミニデイ・会食サービスの実施、認知症カフェ、子どもの相談機能、配食サービスがあげられる。

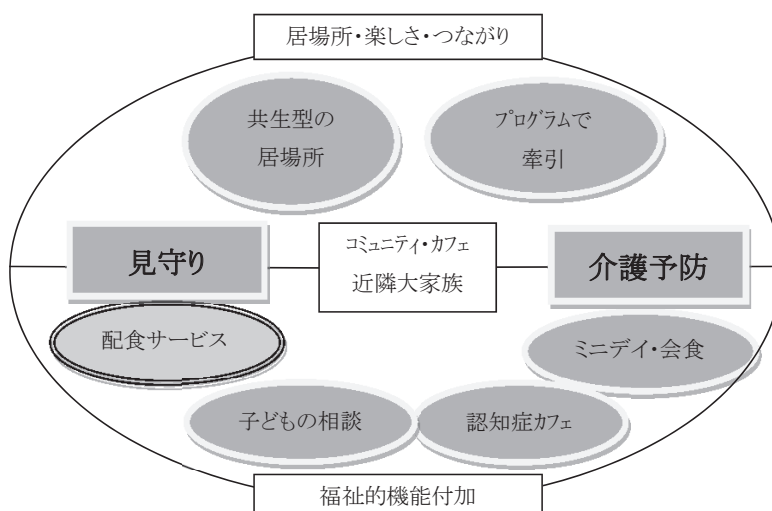


図-6. コミュニティ・カフェ「近隣大家族」が提供する居場所と福祉的機能

二つめは、地域の相互扶助力を向上させたことである。配食サービスの配達を地域の人に委ね、さらに担い手の「おせっかい」を奨励させた「見守り重視」の新たな配食サービスのスタイルを確立させたことである。ボランティア精神に火をつけることで、やりがいを与えている。活動がニーズに応えるだけでなく、担い手の満足感を高め、さらに熱心に取り組む人へと変えるだけでなく、次の担い手を育てる孵卵器の役割を果たしている。これは、当法人が予期しなかった嬉しいサプライズであったかもしれない。また、居場所があることで、人々がご近所の心配事情報を寄せてくる。まさに、見守りの拠点になっていることである。そして情報を受け止め、対応できる専門職がそろっていることが、当法人の強みである。

三つめは、このカフェと配食サービスが同一拠点で行われていること、その媒介をコーディネーターが担っていることである。コミュニティ・カフェの手法を用いた居場所は楽しいコトが起こる場で、多くの人々を惹きつける。同じ場所で必要なコトである配食サービスが行われている。そしてその2つをコーディネーターが結びつけるという構図が描

かれる。このような3点セットによって、人々が元気になって地域貢献にかかわるとい  
う循環を働かせることができる。配食サービスで得た利用者情報を地域ケアに組み込むた  
めにもコーディネーターの存在は欠かせない。

なぜ、このような数々の新手法を生み出してきたのであろうか。「見守り」という発想は、  
本来住民からは発せられにくいものである。通常、私たちは、他人から見守られることは  
願っていないために、「見守り」という発想は、本来住民からは発せられにくいものであり、  
専門職の立場からの発想といえる。実際、配食サービスの利用者が、利用の当初は見守り  
を受け入れておらず、むしろ利用を重ね、配達者やその組織と信頼関係を結んでいく中で、  
徐々に見守りをうけいれていく様子が、友永らの研究で明らかにされている。じゃんけん  
ぼんは、事業者の立場から、たいへん上手に住民の力を引き出してきたといえるだろう。

では、なぜ住民の力を引き出すことに力を注いだのであろうか。急速に事業を拡大して  
きた、じゃんけんぼんにとって、人材不足は大きな課題であることが推察される。「気に入  
たらまた来て、元気になって、そして手伝ってください」という井上理事長の言葉は、そ  
の切実な願いを表している。じゃんけんぼん自身が、助けてくれる住民を必要としていた  
のである。そして願いを形にしたのが、「見守り配食」ではないだろうか。このような見  
守りを重視した配食サービスは、他のケアマネージャーのニーズにもかなうものであった  
ことは言うまでもない。

またコミュニティ・カフェの手法を用いた集客力の高い居場所づくりは、介護予防、認  
知症予防を実現するために必要であっただけでなく、認定NPOとして地域の人々の支持  
を得て社会貢献活動を展開する上で、必須となる活動であったことが推察される。

このように、法人自身の切実なニーズが、住民の力を引き出すという新たな発想や知恵  
や工夫を生み出してきたといえる。

群馬県のじゃんけんぼんが行っている住民の力を引き出し、事業者と協力して地域包括  
ケアを進めていく実践、特に、配食サービスを通じた見守りと支援、利用者情報の関係機  
関への伝達は、現在進められている地域包括ケアシステムの中で、住民が無理なくかかわ  
れる役割の一つであり、その一翼を担える活動モデルの一つを提示している。さらに、コミュ  
ニティ・カフェの手法を用いながら、プログラムによって集客率を高め、多様な人々を対  
象に福祉機能を取り入れた共生型の居場所づくりは、居場所づくりの優れた実践である。

これらの手法と実践は、他地域でも検討する価値ある取り組みと思われる。

## 【謝辞】

本研究をまとめるにあたり、じゃんけんぼんの井上謙一理事長とコーディネーターの目  
崎智恵子氏にお世話になりました。心より、感謝申し上げます。

## 【引用文献】

- 青木淳 (2004) 『『はらっぱ』と『遊園地』』 王国社, pp.6～12
- 飯田詠子・初見学 (2008) 「都市におけるコミュニティ形成の場に関する研究～コミュニティカフェの運営形態を通して～」 日本建築学会大会学術講演梗概集, p.331～332
- じゃんけんぽん HP : <http://www.jankenpon.jp/>
- じゃんけんぽん事業報告 : [http://www.jankenpon.jp/balance\\_sheet/](http://www.jankenpon.jp/balance_sheet/)
- 厚生労働省 (2015) 「介護予防・生活支援総合事業」
- 小林良二 (2013) 「8章 地域の見守りネットワーク」 『協働性の福祉社会学 個人化社会の連帯』 藤村正之編, 東京大学出版会, p.159, p.164
- 倉持香苗 (2014) 「コミュニティカフェと地域社会—支え合う関係を構築するソーシャルワーク実践」 明石書店, pp.146～169
- 群馬県佐波郡玉村町で2013年12月14日「ふれあいの居場所づくりフォーラム in たまむら」でのパンフレット
- 町田市見守り支援ネットワークマニュアル :  
<http://www.city.machida.tokyo.jp/iryu/old/shiminnokatae/seikatsukurashi/mimamori/mimamorishien/mimamori.files/mimamori.pdf>
- 認定NPO法人じゃんけんぽん棟高町カフェ通信 (2015年4月1日) 第53号
- 認定NPO法人じゃんけんぽん棟高町カフェ通信 (2015年9月1日) 第58号
- さわやか福祉財団 (2008) 「ふれあいの居場所ガイドブック」
- 田中共子, 兵藤好美, 田中宏二 (2007) 「高齢者援助ボランティアにおける活動の動機と効果—ソーシャルサポートの交換の視点を中心に—」 文化共生学研究, 5巻1号, pp.51～69
- 田中康裕・鈴木毅・松原茂樹他 (2007a) 『『下新庄さくら園』における目的の形成に関する考察—コミュニティ・カフェにおける社会的接触—』 日本建築学会計画系論文集 第613号, pp.135～142
- 田中康裕・鈴木毅・松原茂樹他 (2007b) 「コミュニティ・カフェにおける『開かれ』に関する考察—主(あるじ)の発言の分析を通して—」 日本建築学会計画系論文集 第614号, pp.113～120
- 田中康裕・鈴木毅・松原茂樹他 (2007c) 「日々の実践としての場所のしつらえに関する考察—『ひがしまち街角広場』を対象として—」 日本建築学会計画系論文集 第620号, pp.103～110
- 友永美帆・野村知子・杉澤秀博 (2015) 「単身高齢者のくらしにみる配食サービスに生かし方」 老年学雑誌第5号, pp.1～20.
- 全国老人給食協力会 (2012) 「べんけい草」 Vol.114. 全国老人給食協力会編集
- 全国社会福祉協議会 (1992) 「生活援助型食事サービスマニュアル」